

随想

『本当にタコは賢いのか!? (タコの養殖禁止で考える生物の知能)』という記事を読んだ

出張の道中でインターネット情報を流し見ていたら《本当にタコは賢いのか!? (タコの養殖禁止で考える生物の知能)》という記事が目についた。

タコの賢さについては以前にも触れたことがある(注1)。サッカーのワールドカップ勝者をタコに占わせる、といった企画で、タコの知能については与太話でよく目にするが、《カリフォルニアでタコの養殖禁止条例が可決された》というニュースがとくに目を引いたため、改めてタコくんぬんを語ってみたくなった。まずは記事の内容概略を以下に紹介する。

《記事(注2)の内容》今年九月末、米カルフォルニア州議会がタコの養殖を禁止する法案が可決された。法案を提出した

ステイー・ベネット議員は『養殖は高知能生物タコに過大なストレスを与え虐待に当たる。タコはまだ産業化がされていないため、止めるなら今しかない』という(タコの養殖は実現せず、日本が先陣を切って研究中)。知能で生き物に優劣をつけるのは《優生思想》だろう。正直、多くの家畜は頭がいい。サイエンス誌に掲載された家畜生物学研究所(FBN)のレポート「What are farm animals thinking? (農場の動物は何を考えている?)」によれば、豚は八五%の確率で部屋に閉じ込められた他の豚を助けるためにドアを開けてやり、牛はイヌのようにトイレを覚え、ヤギは人間のジェスチャーを理解し、表情を読み取るという。またヤギ

の記憶力はチンパンジーやゴリラと同レベルとのこと。——中略——現在、牛や豚等の家畜の知能はイヌと同程度で人間の三、五歳児相当と考えられている。——中略——《タコは本当に頭がいいのか?》タコはビンのふたを開けてエサを取り出すことができる。道具を使うという点ではチンパンジー並みの知能といえる。人間の顔も識別するし、魚を猟犬のように使って狩りをすることもわかった。リスボン大学とドイツのマックス・プランク動物行動学研究所によると、タコは魚を使って獲物を見つけ、タコが巣から追い出して得た獲物を獲るといふ。

タコはすごいと賢いように思えるが、タコの脳の神経細胞は約五億で犬の脳の神経細胞とほぼ同数(人間の脳の神経細胞は約一、〇〇〇億)。ただし、タコの脳は中心に一つと八本の腕にそれぞれ一つ、全部で九つに分かれているため高度反射が腕に備わっている。

また、動物の知能を測る基準に「鏡像認識(鏡の自分像を自分と認識する力)」がある。イヌ、ネコは数回の訓練鏡像認識を身に着けるが、タコにもある。故にこれで賢いとは簡単には言えない。——中略——マルハナバチは、ボールを置いておくとそのボールに乗って転がして遊ぶ。(*Animal Behaviour, Volume 194, December 2022, Pages 239-251)。これは知能といえよう(著者の意訳)。知能が低い生き物は食べていいとすれば、牛豚どころか魚や虫も

(株)PQC研究所 加藤 宏光

アウト。だから動物愛護主義者はベジタリアンばかりなのかと思うが、実は植物にも知能があるらしい。昆虫に葉や身をかじられた植物が警戒物質を出すと他の植物もそれに呼応し、全体で身を守るということが知られている。コナガ(害虫)に襲われた植物は、コナガサムライコマユバチというコナガの天敵を呼び寄せる。植物が身を守るために助っ人を呼んでいるのだ。植物は痛みを感じている。イスラエルのテルアビブ大学の研究で、枝を切る、水を与えない等の過度なストレスをトマトやタバコに与えると、超音波の悲鳴を上げることがわかった。トウモロコシや小麦等でも同様の悲鳴が確認されている。どうやら植物は痛みやストレスを感じ、それを植物同士で伝えているらしい。さらに、ブリティッシュコロンビア大学(カナダ)のスザンヌ・シムードによると、森林がコンピュータネットワークのように結実点を持つ巨大な根のネットワークを作り、結実点に立つ老木(ニマ

ザツリ)を中心に栄養や水、恐らくは情報もやり取りしている。日陰で芽を出した木には、マザーツリーから養分を与えるように木々に指令が送られ、彼らは幼木を育てるといふ。同族の樹木は助け、違う種類の樹木は見捨てる場合もあるというから、人間とは違うものの、植物には知能があると言っているのではない。植物に知能があると考えた科学者は増えており、いずれ多勢となるだろう。カビのような粘菌さえ、複雑な経路を最短距離で結ぶ、ある種の知性を持つことを北海道大学の研究者が発見している。こんな現実なら動物愛護主義者は何を食べるのか。——以下略——

ずいぶん長い引用になってしまったが、これでもかなり意識により短くつづめている(本当は全文を紹介したいのだが)。もう三五年以上前に、ドイツのローマン社を訪問した際に、動物愛護(AW)の圧力が日増しに強くなっていることを聞いた。著者は当時からAWには強い違和感を持っていた(現在も

しかり)。次第にAW圧力に屈しつつある話を聞いて、「動物の命を取ることを否定するなら、同じような価値を持つ植物の命を絶つことについても同様の忌避をせねばおかしい。そうならば食べるものがなくなるが、どのように思うのか?」と聞いてみた。しかし、そのサイエンティストは、著者の言わんとする意味すら理解できなかった。

ここに紹介したエピソードは、三五年以上前に著者の感じた矛盾をいまだに世界は放置してAW活動家の自儘が世界基準となつていふことを実感した。著者が足掛け六年間にわたって中国でコンサルテーションをしていることは、本誌でも紹介したことがある。多くの業界人と食事をする際に『日本人は食事の前に《頂きます》と言うが、あれは何ですか?》と何度も問いかねられた。

著者はその度に次のように答える。

『私たちが生きるために食べるものは、米でも野菜でも魚でも、あるいは豚や牛のような家畜でもすべてが命を持っています。その命をもらわないと、私たちが命を繋げない。だから、その多くの命を《頂きます》とって感謝の気持ちを伝えるのです』

この話を聞いたすべての人々が同感してくれる。そして、著者とともに《頂きます》とってから食事を摂るヒトも多い。タコが賢いか否かという話題からずいぶん離れてしまった。そんな面倒くさいことをいつまでも考えながら食事をしているわけではないのだが。生きるものすべてが知能を持っている、と考えることには、何かしらロマンを感じてしまう。

注1…本誌二〇二一年三月号随想「タコと人間」

注2…引用コラムの著者・久野友萬(ひさの ゆーまん)サイエンスライター。一九六六年生まれ。富山大学理学部卒。企業取材からコラム、科学解説まで、科学をテーマに幅広く扱う。